

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720311

研究課題名(和文)日本中世漢籍受容の歴史的研究

研究課題名(英文)Study of the history of the Chinese classics acceptance Japanese Middle Ages.

研究代表者

高田 宗平 (TAKADA, Sohei)

京都大学・人文科学研究所・非常勤講師

研究者番号：80597188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「漢籍受容史」の新構築を目指し、日本中世漢籍受容の変遷の概要を把握するための基礎的研究を目的としたものである。禁裏・仙洞御所周辺の漢籍受容・漢学講究、公家・官人の漢籍受容・漢学講究、仏家の漢籍受容・漢学講究、『論語義疏』の受容、の様相を考察し、その成果を著書、影印・翻印等として公表し、国際学術研究集会で口頭発表した。

研究成果の概要(英文)：The present study was aimed at new construction of the "Chinese classics receptor History". Basic research in order to get an overview of the transition of Japan medieval Chinese classics receptor is intended. As a result, it has published a book. As a result, and oral presentations at international Society.

研究分野：日本古代中世漢籍受容史・漢学史

キーワード：漢籍 漢学 『論語義疏』 受容史 鈔本 写本

1. 研究開始当初の背景

日本中世漢籍受容の歴史的研究は、近年、行われていない。日本史学、日本文学、中国文学、中国哲学、書誌学・文献学の分野からの日本中世漢籍に関する研究は、各分野からの一面的な検討であって、漢籍受容の総体を解明するに至っていない。

これまでの中世の漢籍受容に関する先行研究は、上記の通り、各分野から行われたが、古記録の記事及び奥書・識語のみを例証として検討したものや、漢籍諸本と日本古典籍に引用された漢籍との異同を検討したものなど、何れも現象論までで止まっている。そのため、日本中世の漢籍受容の変遷は断片的にしか解明されていなかった。

本研究では、方法論として核となる歴史学と書誌学・文献学を連結・融合させた「漢籍受容史」の新たな構築を目指すための基礎的研究を行う。また、従来、日本における漢籍受容や漢学は、主として中国文学・中国哲学の分野から研究が行われたこともあり、中国文化の支流・亜流と見なされた感が拭いきれない。日本における漢籍受容や漢学は、我が国の歴史の中で培われた漢籍講究の成果であり、日本の学術文化として日本の歴史の中で位置付けを行う必要がある。本研究は、以上の見地で考察を行う上での基盤となることも意図している。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」で記したように、従来の各分野からの一面的な検討で、漢籍受容の総体を解明するに至っていない研究状況を解消するため、「漢籍受容史」の新構築を目指し、日本中世漢籍受容の変遷の概要を把握するための基礎的研究を目的とする。

中世における「漢籍受容史」を解明するには、多面的に検討する必要がある。その基礎的研究として、(1) 禁裏・仙洞御所周辺の漢籍受容・漢学講究、(2) 公家・官人の漢籍受容・漢学講究、(3) 仏家の漢籍受容・漢学講究、(4) 『論語義疏』の受容、の様相を解明することを目的とする。具体的な方法は、「3. 研究の方法」に記す通りである。

3. 研究の方法

本研究課題である「日本中世漢籍受容の歴史的研究」、すなわち、日本中世漢籍受容の変遷を解明するための基礎的研究として、次の4点に絞って検討を加える。

- (1) 禁裏・仙洞御所周辺の漢籍受容・漢学講究
- (2) 公家・官人の漢籍受容・漢学講究
- (3) 仏家の漢籍受容・漢学講究
- (4) 『論語義疏』の受容

それぞれは、人的交流、書写・校合などの学問営為などで関連していることが多く、複眼的多面的な見地も意識して検討を加える。

上記(1)～(4)の具体的な研究方法は以

下の通りである。

(1) 禁裏・仙洞御所周辺の漢籍受容・漢学講究については、当該期屈指の漢学の学殖を有した鎌倉時代後期の花園天皇(後に上皇)の漢籍受容・漢学講究を検討する。『花園天皇宸記』(記主花園天皇)を読み進め、そこから漢籍受容・漢学講究に関する事項を抽出し、データ化を図り、漢学講究をめぐる人的交流・学問営為を考察する。花園天皇の周辺には、公家・官人が集い、漢学を講究したことから、(2) 公家・官人の漢籍受容・漢学講究とも関連する。

(2) 公家・官人の漢籍受容・漢学講究については、藤原北家日野流の支流広橋家に伝来し、現在、国立歴史民俗博物館所蔵の廣橋家旧蔵記録文書典籍類、藤原北家高藤流の勤修寺家に伝来し、現在、京都大学総合博物館所蔵の勤修寺家旧蔵文書、の両資料群に含まれる、改元・年号資料を実見調査し、書誌事項を採録し、考察する。必要に応じて、紙焼き写真、ないしは画像データ入手する。

当該期屈指の漢学の学殖を有した院政期の撰閲家の藤原頼長の漢籍受容・漢学講究を検討する。『台記』を読み進め、そこから漢籍受容・漢学講究に関する事項を抽出し、データ化を図り、漢学講究をめぐる人的交流・学問営為を考察する。

(3) 仏家の漢籍受容・漢学講究については、次の通りである。

南北朝時代には勅願寺となり、天皇の行在所とされた金剛寺に所蔵の漢籍・準漢籍を実見調査し、書誌事項を採録し、考察する。

清原教隆に漢籍・漢学を学ぶなど漢籍・漢学に精通していた金沢実時が設立した金沢文庫や、実時が創建した称名寺に伝来した聖教を調査する。とりわけ、漢籍受容・漢学講究の徴証が存する資料を対象とする。これらを保管する神奈川県立金沢文庫に所蔵の聖教を実見調査し、書誌事項を採録し、考察する。必要に応じて、紙焼き写真、ないしは画像データ入手する。

(4) 『論語義疏』の受容については、中世に撰述された典籍から『論語義疏』の引用文を搜索し、引用が認められた典籍の撰者とその階層、引用文と旧鈔本『論語義疏』との異同、等を調査し、中世における『論語義疏』受容史の実態を考察する。『論語義疏』の引用文が認められる典籍については、実見調査し、引用文の文字を厳密に調査・確認する。また、書誌事項を採録し、必要に応じて、紙焼き写真、ないしは画像データ入手する。

以上の(1)～(4)を考察し、順次、論文、翻印、学会発表等を通じて公表する。

4. 研究成果

- (1) 論文・翻印等

禁裏・仙洞御所周辺の漢籍受容・漢学『花園天皇宸記』を読み進め、そこから漢籍受容・漢学講究に関する事項を抽出し、データ化を図った。花園天皇周辺の漢学講究に

関する人的交流・学問営為を検討するための基礎的検討を行った。鎌倉時代末期の仙洞御所では、宋学の『論語集注』・『論語精義』もしくは『論孟精義』も講読されていたが、依然として漢唐訓詁学、特に義疏学の所産である『論語義疏』・『論語正義』も多く講読されており、当時の仙洞御所における『論語』の講読は、古注を基本とする学問態度と見られること、花園上皇との『論語』談義を行った中原師夏、堀川光継、菅原公時、菅原家高が『論語義疏』を講読していたと推測されることを指摘し、更に、花園上皇の周辺の仙洞御所に漢学や文才に長けた中級貴族・官人が集い、特徴的な漢籍・漢学の講究・談義の「場」として、論壇が形成されていたことを明らかにした。

これに関する成果の一部は、著書に取り込まれ、活かされている。

公家・官人の漢籍受容・漢学講究

(a) 廣橋家旧蔵記録文書典籍類

中国思想史を専門とする山梨県立大学国際政策学部 名和敏光 准教授の協力を得て、国立歴史民俗博物館所蔵の廣橋家旧蔵記録文書典籍類に含まれている改元・年号資料を中心に実見調査を実施し、書誌事項を採録し、重要なものについては紙焼き写真を入手した。ただし、当該資料群は、資料点数が多いため、全て実見することはできず、今後の調査・研究の予備的調査・研究とならざるをえなかった。当該資料群から、重要なものを選び、行款（行取・字詰）を可能な限り、原本に忠実に再現し、原本の様態が分かるように配慮して翻字した。それらのうち、〔室町時代〕写『日野家代々年号勘文 自応保度至応安度』の影印・翻印を公表し、まず年号勘文とは如何なるものか、どのように漢籍が引用されているのかなどを提示した。また、成果の一部は、著書及び国際学術研究集会における口頭発表に取り込まれ、活かされている。

翻印と引用漢籍の分析は、学術雑誌等に発表していく予定である。

(b) 勸修寺家旧蔵文書

京都大学総合博物館所蔵の勸修寺家旧蔵文書に含まれている改元・年号資料を中心に実見調査を実施し、書誌事項を採録し、重要なものについては紙焼き写真を入手した。当該資料群も上記(a) 廣橋家旧蔵記録文書典籍類と同様、資料点数が多い。従って、全点実見することができず、今後の調査・研究の予備的調査・研究とならざるをえなかった。当該資料群も上記(a)と同様に、重要なものを選び、行款を可能な限り、原本に忠実に再現し、原本の様態が分かるように翻字し、紙背が存するものは紙背も含め検討を加えた。本研究を踏まえ、今後の研究に活かし、学術雑誌等に発表していく予定である。

(c) 藤原頼長の漢籍受容・漢学講究

『台記』を読み進め、そこから漢籍受容・漢学講究に関する事項を抽出し、データ化を図った。しかし、データ化は完了しておらず、

完了し次第、これを基に、藤原頼長周辺の漢学講究に関する人的交流・学問営為を検討していく予定である。藤原頼長の周辺には、源師頼、藤原令明、中原師安、藤原通憲（信西入道）、源俊通、藤原敦任、菅原登宣、中原師元、中原広季、藤原孝能、藤原友業等が集まったこと、源師頼は上級貴族であるが、頼長の周辺には中下級官人等の文人・学者が多く集まり、特徴的な漢籍・漢学の講究・談義の「場」として、論壇が形成されていたことを明らかにした。

これに関する成果の一部は、著書及び国際学術研究集会における口頭発表に取り込まれ、活かされている。

仏家の漢籍受容・漢学講究

(a) 金剛寺

金剛寺に所蔵の漢籍・準漢籍を実見調査し、書誌事項を採録し、画像データを入手し、書誌解題を執筆するなど、基盤となる書誌学的検討を加えた。学術雑誌等に発表する予定である。

これに関する成果の一部は、著書及び国際学術研究集会における口頭発表に取り込まれ、活かされている。

(b) 金沢文庫

神奈川県立金沢文庫に所蔵の聖教を実見調査し、書誌事項を採録し、重要なものは紙焼き写真を入手した。翻字し、引用漢籍の分析、撰者などの検討を加えた。更に調査し、検討を加えていく予定である。

これに関する成果の一部は、著書及び国際学術研究集会における口頭発表に取り込まれ、活かされている。

『論語義疏』の受容

中世撰述の典籍から『論語義疏』の引用文を搜索し、引用が認められた典籍の撰者とその階層、引用文と旧鈔本『論語義疏』との異同を調査し、中世における『論語義疏』受容史の実態を検討した。また、『論語義疏』の引用文が認められる典籍については、実見調査し、原本調査に基づいた引用文の文字を調査・確認した。原本調査を実施したものは、書誌事項を採録し、重要なものは紙焼き写真を入手した。

中世において『論語義疏』は、中下級官人、仏家の両階層に受容され、仏家では、真言、真言律、華嚴、浄土教、臨済などの僧侶に広範に受容されたことを明らかにした。『論語義疏』は、古代では親王、摂関家、上級貴族、中下級貴族・官人、仏家に受容され、古代中世を通じて、広範な階層に浸透し、連綿と受容されていたことを明らかにし、古代中世の『論語義疏』受容層の変遷を明らかにした。

これらの成果は、著書に取り込んで活かし、国際学術研究集会において口頭発表した。

また、中世における論語学の一端のみならず、中世における漢籍解題書・類聚書の一例でもある、曼殊院門跡所蔵の『論語総略』の影印・翻印を公表し、研究基盤を整備した。『論語総略』は先行研究の行論を通じて、内

容を窺い知ることしかできなかつたが、影印・翻印を公表したことにより、本文の字様・筆致、行款などの原本の様態が確認できるようになった。『論語総略』の全貌を知ることができる資料を提供できたことは、『論語義疏』受容史上のみならず、中世漢籍受容・漢学研究上、極めて意義深い。

中世撰述の典籍からの『論語義疏』引用文の搜索は、引き続き実施し、更なる引用文蒐集に努めたい。なお、中世撰述の典籍所引『論語義疏』と旧鈔本『論語義疏』との異同は調査継続中で、今回、公表には至っていない。

(2) 資料調査

本研究遂行の基盤となる、漢籍・日本古典籍の原本調査（原本調査ができない場合は画像ないしは紙焼き写真）の実施機関は以下の通りである。

石川武美記念図書館成篁堂文庫、叡山文庫、大阪市立大学学術情報総合センター、神奈川県立金沢文庫、京都大学総合博物館、京都大学大学院文学研究科図書館、京都大学附属図書館、宮内庁書陵部図書寮文庫、慶應義塾図書館（慶應義塾大学三田メディアセンター）、神戸松蔭女子学院大学図書館、高野山大学図書館、国立公文書館内閣文庫、国立国会図書館、国立歴史民俗博物館、金剛寺、智積院智山書庫、東京大学史料編纂所、東洋文庫、徳川ミュージアム彰考館レファレンスルーム、名古屋市蓬左文庫、萩市立萩図書館、前田育徳会尊経閣文庫、明治大学中央図書館、龍谷大学大宮図書館、等において調査を実施した。

これらの調査を通じて得た書誌事項や新たな知見の一部は、著書、論文、翻印、国内外の学会での口頭発表にて公表している。

(3) 国際学術研究集会における口頭発表

平成 27 年度、国際学術研究集会「西域與東瀛 中古時代經典寫本國際學術研討會」（於 上海師範大学徐匯校区西部学術活動中心（学思園）、2015 年 12 月 19 日～20 日）に招聘された。

当該学術研究集会において、日本古代の『論語義疏』の受容史の実態を踏まえた上で、無批判に活字本に拠らず、良質な鈔本を底本とする書誌学・文献学的方法論によって導いた中世の『論語義疏』受容史の実態について、「日本中世《論語義疏》受容史初探」の題目で口頭発表したことは重要な成果である。また、総合討論・大会総括・閉幕式にてパネリストとして、日本伝存古鈔本漢籍や日本古典籍所引漢籍の特質、日本中世漢籍受容史・漢学史研究の意義を大いに提唱し、賛同を得ることができた。すなわち、中国で開催され、経学、敦煌学・吐魯番学、中国古典学、日本漢学などの各分野の研究者が出席した国際学術研究集会において、中国人研究者に、日本伝存漢籍資料の重要性・貴重性及び日本漢籍受容史・漢学史を日本の学術文化として日本の歴史に位置付けた研究の重要性の二点を提唱することができたことは意義深く、これも重要な成果である。

なお、当該学術研究集会における口頭発表を基にした論文は、平成 28 年度以降に、『古典學集刊』編集部による国際学術雑誌に掲載される予定である。

以上の成果は、本研究が国際的な関心を呼ぶ課題であり、国際的な学術研究価値を有していることを示していると思われる。

(4) 国内外の研究者との学術交流等

海外の国際学術研究集会や国内の学術研究集会、学会などに出席して、日本中世漢籍受容史・漢学史に関する情報交換を行った。

国外の研究者との学術交流では、国際学術研究集会「西域與東瀛 中古時代經典寫本國際學術研討會」（於 上海師範大学徐匯校区西部学術活動中心（学思園）、12 月 19 日～20 日）の席上において、上海交通大学人文学院虞万里 特聘教授、浙江大学古籍研究所 許建平 教授、上海師範大学哲学学院 石立善 教授、南京大学文学院 童嶺 副教授と親しく情報交換でき、指教を受け、新たな知見を得ることができたことは意義深い。

国内の研究者との学術交流は、京都大学人文科学研究所術数学研究会（代表：京都大学人文科学研究所 武田時昌 教授）、京都大学人文科学研究所伝統医療文化研究会（代表：大阪府立大学人間社会学部 大形徹 教授）の研究会や国際シンポジウム・国際学術研究集会に出席し、国内外の研究者と情報交換することができた。また、日本中世の禅林などにおいて受容された『大易断例ト筮元龜』を講読している、京都大学人文科学研究所術研究会に出席し、出席の研究者から、日本中世の易学、陰陽五行思想、陰陽道などについて、指教を受け、情報交換することができた。

日本史学関連では、科研費・基盤研究(C)「続日本紀を中心とした八世紀紀年史料の総合的研究」（研究代表者：皇學館大學研究開発推進センター史料編纂所 遠藤慶太 准教授）シンポジウム「国史編纂」に出席し、日本古代の漢籍受容や類書利用などについて問題提起し、討論するなど、日本古代史・日本文学研究者と情報交換できた。

(5) 資料蒐集

京都大学総合博物館、前田育徳会尊経閣文庫、神奈川県立金沢文庫、国立歴史民俗博物館、金剛寺、名古屋市蓬左文庫の所蔵資料の紙焼きを購入、あるいは画像データを手し、当該資料の調査・研究に活用した。これより得た新たな知見の一部は、著書、論文、翻印、国内外の学会での口頭発表にて公表している。

(6) 今後の展望等

中世の漢籍受容に関する研究資料は、影印や翻字されたものが限られている。このような状況に鑑みて、研究基盤整備を意図して、資料の翻印・影印、書誌解題を中心に学術雑誌に発表した。それらを包括的に活用し、国際学術研究集会では受容史に関する研究を口頭発表し、そして個々の調査・研究成果を著書に取り込み有機的に活かした。特に、国

際学術研究集会において、中世の『論語義疏』受容史の実態について口頭発表し、同研究集会の総合討論・大会総括・閉幕式のパネリストとして、日本伝存古鈔本漢籍や日本古典籍所引漢籍の特質、日本中世漢籍受容史・漢学史研究の意義を大いに提唱し、賛同を得ることができたことの意義は極めて大きい。

今回は、廣橋家旧蔵記録文書典籍類、勸修寺家旧蔵文書、称名寺聖教は予備的調査・研究となってしまうが、これを踏まえた研究計画を策定して、実行していく予定である。

また、中世の『論語義疏』受容史の実態の考察を通じて、中世漢学の受容層に関する研究は、明経博士清原氏、五山僧について進んでいるが、その他の階層については等閑に付されていると言っても過言ではない状況であって、現在の中世漢学研究の研究偏重を解消する必要があることが明らかになった。これは極めて重要な課題であり、今後、研究計画を策定して、実行していく予定である。

以上のような、成果・意義、今後の課題と新たな課題がある。本研究にて、日本中世漢籍受容の歴史的研究の基礎を築き、端緒を開くことができたと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

高田宗平、叡山文庫真如蔵所蔵『臺宗三大部外典要勘鈔』諸該書誌解題稿、古典學集刊、査読有、第 2 輯、2016、掲載ページ未定、(掲載予定)

高田宗平、国立歴史民俗博物館所蔵『論語〔集解〕』書誌解題稿、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、第 198 集、2015、pp.9-20

高田宗平、日本中世《論語義疏》受容史初探、西域與東瀛 中古時代經典寫本國際學術研討會論文集、上海師範大学中国古典学研究中心・《古典学集刊》編輯部、査読有、2015、pp.51-59

高田宗平・名和敏光、国立歴史民俗博物館所蔵『日野家代々年号勘文 自応保度至応安度』影印・翻印篇、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、第 186 集、2014、pp.233-257

高田宗平、叡山文庫真如蔵所蔵『台宗三大部外典要勘鈔』諸本書誌解題稿、人文科学、査読無、第 18 号、2013、pp.100(37)-74(63)

高田宗平、曼殊院門跡所蔵『論語総略』影印・翻印、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、第 175 集、2013、pp.55-76

[学会発表](計 5 件)

高田宗平、日本中世《論語義疏》受容史初探、西域與東瀛 中古時代經典寫本國際學術研討會、2015 年 12 月 19 日、上海師範大

学徐匯校区西部学術活動中心(学思園)(招待講演)、上海(中華人民共和国)

高田宗平、総合討論・大会総括・閉幕式 パネリスト、西域與東瀛 中古時代經典寫本國際學術研討會、2015 年 12 月 20 日、上海師範大学徐匯校区西部学術活動中心(学思園)(招待講演)、上海(中華人民共和国)
高田宗平、日野一流と年号勘申『迎陽記』を手がかりにして、人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 共同研究 基盤研究「廣橋家旧蔵文書を中心とする年号勘文資料の整理と研究」研究会、2015 年 7 月 12 日、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)
高田宗平、旧鈔本『論語義疏』の伝本並びに日本古代に於ける『論語義疏』受容の歴史、京都大学人文科学研究所 共同研究拠点 共同研究 B「術数学 中国の科学と占術」研究班研究会、2014 年 2 月 1 日、京都大学人文科学研究所本館(京都府京都市)
高田宗平、国立歴史民俗博物館所蔵『論語集解』簡介、人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 共同研究 基盤研究「高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究」研究会、2013 年 11 月 2 日、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)

[図書](計 2 件)

高田宗平、塙書房、日本古代『論語義疏』受容史の研究、2015、総ページ数 446
劉玉才主編(劉玉才の他 22 名 22 名に高田宗平を含む による分担執筆)、北京大学出版社、日本《論語》古鈔本綜合研究 從鈔本到刻本：中日《論語》文獻研究、査読有、2013、総ページ数 218(担当：分担執筆 pp.175-213)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 宗平 (TAKADA, Sohei)
京都大学・人文科学研究所・非常勤講師
研究者番号：80597188

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：